

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有  
〒207-0005  
東京都東大和市高木3-315-1-2-2  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

# 東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

## 第87号

毎月発行

発行 2019年(令和元年)8月16日 金曜日

2019年(令和元年)8月16日 金曜日

### 【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

#### 【砂越 豊】

宮城県生まれ、65歳、経営  
コンサルタント、趣味は縄  
文研究、今年1月に『東北先  
史時代学』を提唱、東北から  
日本を変えることを標榜。  
また縄文遺跡保存活動とし  
て郷里の涌谷町の『長根貝  
塚保存活動』開始。映像プ  
ロデュース事業にも進出。



## ラグビーW杯・前哨戦第一戦、釜石開催 岩手・釜石鶴住居(うのすまい)復興スタジアム 選手・観衆・関係者が一体となって開催を祝す！



試合開始前のスタジアム

先月二十七日、岩手県の「釜石鶴住居復興スタジアム」でワールドカップラグビーに向けての日本代表の前哨戦の口火が切られた。ここしばらくベールに包まれていた日本代表チームの実力のお披露目戦ともいえる一戦がこのスタジアムで開催されることに、選手も地元ファンも関係者もラグビーファンも非常に大き

な意義を感じていた。まずこの地は、あの大震災では千人以上の死者・行方不明者を出し、甚大な被害を受けた地である。また、ラグビーファンなら知らない人はいないが、かつて「北の鉄人」といわれ、日本選手権七連覇を勝ち取った往年の新日鉄釜石のホームの地でもある。さらには、甚大な被害を

今年九月から始まるワールドカップラグビーでは、日本代表はベスト8に残ることを目標に掲げ、その最初の試金石の舞台ですばらしい勝利をおさめた。開催にこぎつけただけでも感激のところ、すばらしいプレーで観衆を魅了した。試合後、田村選手がこの「釜石鶴住居復興スタジアム」でプレーする意義をしみじみ語る姿にも感激し

受けた地でありながらも、ワールドカップラグビーを誘致するため、新日鉄釜石ラグビーチームOBらを中心に関係者が尽力し、ラグビースタジアムを新設した場所でもある。新設の会場はここだけである。とどめは、このスタジアム建設地は、かつて津波で壊滅的な被害を受けた小中学校の跡地である。



熱烈応援団



釜石東中生による両国歌斉唱

た。筆者の大好きなリーチ・マイケル選手も同様だった。特にリーチ・マイケル選手はケガからの復帰戦でもあり、なおさら感慨深かったことだろう。かつて、3・11から一年

半後、取材で釜石鶴住居を訪れたが、まだ津波の被害の跡も生々しかった。そこからの復興であり、さらにラグビースタジアムも新設した関係者にあたためて敬意を表したい。建設表明の際にはよほどの勇気が必要だっただろう。



3・11直後の鶴住居



勝利の報告だけではない

また賛成者ばかりではなかったはずだ。甚大な被害を被った地元復興を急ぐべきで、ラグビースタジアム建設など絵空事だと非難もされたであろう。しかしやり遂げたのだ。だからこそ、ひとしおの感激に包まれたのだ。

試合前、地元釜石市鶴住居町の釜石東中生と元日本代表の広瀬氏が両国歌を斉唱した。生徒は歓迎の気持ちと復興支援への感謝を表そうと、君が代とフィジーの国歌を練習して本番では堂々と歌い上げた。何もかもが最高の舞台だった。



## 第60回

### 水産業再興のための 料理レシピ紹介

#### 【鯉とミョウガの さっくり混ぜごはん】

夏バテ対策にぜひ！  
夏酒にもいいかも！



郷土料理愛好家  
松本由美子氏

鯉をオリーブ油と醤油で下味をつけて、ご飯にさっくり混ぜたものです。夏野菜にみょうが、青じそ等も一緒にしたご飯になります。（松本談）



気仙沼の地酒も宮城の  
地酒も海鮮も美味しい  
おだづもっこ（高円寺）





写真でお伝えする  
**東北の風景**  
**夏真っ盛り**

写真撮影  
尾崎匠



# 被災地の看護管理者からの伝言

## 福島第一原発近郊の病院について

東日本大震災の発災から八年五カ月が経った。この間、医療や介護の専門職がどのようなことを考え、どのような行動を取ったかといったことについては、マスメディアでもあまり多く報じられてこなかった感がある。しかし、実際には地域住民や患者、利用者のために獅子奮迅の働きをしていたのである。

今回、第三回日本看護管理学会学術集会のパネルディスカッション「大規模災害における看護管理者の役割」にパネラーの一人としてお招きいただいたことを機に、以前からお付き合いのある看護管理者の方々に、改めて震災の発災から今に至る経過の中で、看護管理者として力を入れて取り組んできたことや、全国の同じ看護管理者に特

に伝えたいことについてお話を伺った。その大枠について、ここに紹介しておくたい。「原発事故には理不尽さ

と見えない恐怖を感じた。仕事では震災を機にいろいろな経験をさせてもらった。何もなかったらこうしたことは経験できなかった。でも、仕事を離れるとまだまだ心に傷がある。震災の話は嫌という気持ちがいっぱいある。震災のことを思い出すと心が切れて、泣きそうになる。今も戻れない故郷の双葉町には、今ここにないものがたくさんあった。ずっとこの思いは死ぬまでもつていくのだと思う。震災から八年が経って、よくなっているかな、とは思えない。思いが強くあつて、今は学会等で震災体験を語るような場から意識的に遠ざかっている」

「重要なのは平時の対応。震災前には常日頃やっていた。原子力は安全だと聞かされていて、災害対策に関心がなかった。しかし、日頃の備えがやはり重要。日々の活動の結果が災害時に出る。災害対応は年間を通してやるべきこととして、医療安全や感染対策と同じように常に日常に組み込まれないといけない。『火事場の馬鹿力』は一瞬のことであり、その後の持続力が大事。つくづく思うのは人間関係の大事さ。地域のひとと仲良くしておくことが災害時にも生きる。日頃やっていたことの答えが災害時に出る。今も双葉町には戻れない。なくすことの影響がこれだけあることを痛

感ずる。心が満たされていないのを感じる」

## 巨大津波に見舞われて

長かおるさんは宮城県の高台、標高一六メートルの場所にあったが、巨大津波はそこにも容赦なく押し寄せ、病院の一階部分が水没した。震災後、町から移管されて地域医療振興協会が指定管理者となった女川町地域医療センターで看護管理者として今も活躍中である。その長さんのお話である。

「震災時に多職種の支援チームが始まった状況確認のためのミーティングが、今も『女川町地域包括ケアネットワーク会議』として続いている。震災の体験が今も活かされている。発災時には病院は『安心の場所』として、避難者もやってくる。災害対策を立てる時はそのことを踏まえた覚悟も必要。一方でスタッフも被災者であることを忘れずに」

「あの震災を乗り越えたからこそ今がある。震災を経験して、自分の力ではどうにもできないことが起こり得ると腹を括った。その経験は伝えていきたい。『自分の命は自分で守る』を身につけるべき。専門職として、自身が要介護者にはならないように意識したい。患者・利用者の安全を守るには、スタッフが元氣

なことが前提。そのためにスタッフの思いを聞き取る機会をつくることも有効。備蓄は分散させること。その中で、自分たちの分は自分たちで日常的に確保しておく。連携ネットワークは平常時から構築しておかないといざという時に機能しない」

横井智美さんは、同じ女川町で当時、町立病院に隣接した女川町老人保健施設の看護部長として勤務していた。発災時、施設には四四名の入所者と八名の通所リハビリテーションの利用者がいた。避難マニュアルでは施設の一階に避難することとされていたが、大津波警報が出されたことで三階屋上に避難することを決断して難を逃れた。現在は女川町地域医療センターで外来看護部長を務めている。その横井さんのお話である。

「震災前には『震度4以上で参集』という基準があつたが、参集の途中で生命の危険に遭遇した職員がいた。まずは自分の命と家族の命を守ることに優先。優先順位を改めた。発災後は、協力し合つて、応援が来るのを信じて、しのご、つなぐという思いだった。ネットワークは平時からつづらなければ、いざという時につながらない。そして、いつでも管理者がいるとは限らない。いる人たちでリーダーシップを発揮して対応できるように日頃からしておく

かないといけない。いつでも備える気持ちが必要」

「自分たちが体験したこととは皆さんの命をつなぐヒントになるかもしれない。次世代につないでいかないとという意識を持っている。『自分だけは大丈夫』という思いは禁物。人は自分の都合のよい考え方をすることも思つておく。マニュアル通りでなく、臨機応変に自分を守る行動をしてほしい。被災時に自分たちの状況を発信するすべがなかった。情報を伝えるすべを確保しておきたい」

鈴木の子さんは福島県の浜通り南部、東北第二の都市いわき市にある、いわき市立総合警備共立病院で看護部長をしていた。震災後、いわき市は福島第一原発と同じ浜通りにあるというところで、風評被害から物資が届かなくなり、医薬品や医療材料などが極端に不足する中、病院一丸となって懸命に地域医療を守った。老朽化が進んだ病院から患者を避難させ、安全が確認できてからまた院内に戻すなどの対応にも追われた。震災後、副看護部長、副院長兼看護部長を歴任して、現在は昨年一二月に移転新築していわき市医療センターという名称となった新しい病院で患者サポートセンターの副センター長として活躍中である。その鈴木さんのお話である。

「震災前には『震度4以上で参集』という基準があつたが、参集の途中で生命の危険に遭遇した職員がいた。まずは自分の命と家族の命を守ることに優先。優先順位を改めた。発災後は、協力し合つて、応援が来るのを信じて、しのご、つなぐという思いだった。ネットワークは平時からつづらなければ、いざという時につながらない。そして、いつでも管理者がいるとは限らない。いる人たちでリーダーシップを発揮して対応できるように日頃からしておく

なことが前提。そのためにスタッフの思いを聞き取る機会をつくることも有効。備蓄は分散させること。その中で、自分たちの分は自分たちで日常的に確保しておく。連携ネットワークは平常時から構築しておかないといざという時に機能しない」

横井智美さんは、同じ女川町で当時、町立病院に隣接した女川町老人保健施設の看護部長として勤務していた。発災時、施設には四四名の入所者と八名の通所リハビリテーションの利用者がいた。避難マニュアルでは施設の一階に避難することとされていたが、大津波警報が出されたことで三階屋上に避難することを決断して難を逃れた。現在は女川町地域医療センターで外来看護部長を務めている。その横井さんのお話である。

「震災前には『震度4以上で参集』という基準があつたが、参集の途中で生命の危険に遭遇した職員がいた。まずは自分の命と家族の命を守ることに優先。優先順位を改めた。発災後は、協力し合つて、応援が来るのを信じて、しのご、つなぐという思いだった。ネットワークは平時からつづらなければ、いざという時につながらない。そして、いつでも管理者がいるとは限らない。いる人たちでリーダーシップを発揮して対応できるように日頃からしておく

なことが前提。そのためにスタッフの思いを聞き取る機会をつくることも有効。備蓄は分散させること。その中で、自分たちの分は自分たちで日常的に確保しておく。連携ネットワークは平常時から構築しておかないといざという時に機能しない」

横井智美さんは、同じ女川町で当時、町立病院に隣接した女川町老人保健施設の看護部長として勤務していた。発災時、施設には四四名の入所者と八名の通所リハビリテーションの利用者がいた。避難マニュアルでは施設の一階に避難することとされていたが、大津波警報が出されたことで三階屋上に避難することを決断して難を逃れた。現在は女川町地域医療センターで外来看護部長を務めている。その横井さんのお話である。

「震災前には『震度4以上で参集』という基準があつたが、参集の途中で生命の危険に遭遇した職員がいた。まずは自分の命と家族の命を守ることに優先。優先順位を改めた。発災後は、協力し合つて、応援が来るのを信じて、しのご、つなぐという思いだった。ネットワークは平時からつづらなければ、いざという時につながらない。そして、いつでも管理者がいるとは限らない。いる人たちでリーダーシップを発揮して対応できるように日頃からしておく

なことが前提。そのためにスタッフの思いを聞き取る機会をつくることも有効。備蓄は分散させること。その中で、自分たちの分は自分たちで日常的に確保しておく。連携ネットワークは平常時から構築しておかないといざという時に機能しない」

「震災前には『震度4以上で参集』という基準があつたが、参集の途中で生命の危険に遭遇した職員がいた。まずは自分の命と家族の命を守ることに優先。優先順位を改めた。発災後は、協力し合つて、応援が来るのを信じて、しのご、つなぐという思いだった。ネットワークは平時からつづらなければ、いざという時につながらない。そして、いつでも管理者がいるとは限らない。いる人たちでリーダーシップを発揮して対応できるように日頃からしておく

なことが前提。そのためにスタッフの思いを聞き取る機会をつくることも有効。備蓄は分散させること。その中で、自分たちの分は自分たちで日常的に確保しておく。連携ネットワークは平常時から構築しておかないといざという時に機能しない」

横井智美さんは、同じ女川町で当時、町立病院に隣接した女川町老人保健施設の看護部長として勤務していた。発災時、施設には四四名の入所者と八名の通所リハビリテーションの利用者がいた。避難マニュアルでは施設の一階に避難することとされていたが、大津波警報が出されたことで三階屋上に避難することを決断して難を逃れた。現在は女川町地域医療センターで外来看護部長を務めている。その横井さんのお話である。

「震災前には『震度4以上で参集』という基準があつたが、参集の途中で生命の危険に遭遇した職員がいた。まずは自分の命と家族の命を守ることに優先。優先順位を改めた。発災後は、協力し合つて、応援が来るのを信じて、しのご、つなぐという思いだった。ネットワークは平時からつづらなければ、いざという時につながらない。そして、いつでも管理者がいるとは限らない。いる人たちでリーダーシップを発揮して対応できるように日頃からしておく

なことが前提。そのためにスタッフの思いを聞き取る機会をつくることも有効。備蓄は分散させること。その中で、自分たちの分は自分たちで日常的に確保しておく。連携ネットワークは平常時から構築しておかないといざという時に機能しない」



移転新築して新しい病院となったいわき市医療センターセンター



女川町医療センターのある高台にも容赦なく津波は押し寄せた

「マニユアルをもつと実用的なものにしくなくて、と痛感した。ただ、震災時は動転しながらも年2回やっていた防災訓練に準じて動けた。専門職として命を落としてはいけない。震災後は防災訓練もどこが発災場所か事前に知らせない『プラインド訓練』にした。震災後、DMATを編成、他地域に応援できる体制をつくった。看護部としても災害支援看護師を多く育成し、災害対策委員をつくった。『自主避難して戻ってきた人、避難せずに残った人、お互いに苦しめた人、お互いに苦しめられた人、お互いの気持ちを聞きながら、時間的掛かっても理解し、認め合うことに努めた。悲しみや苦しみを乗り越え、教訓は忘れないという思いで。災害は他人事ではない。備えだけは忘れな

ないでほしい。その思いをつなぐ。なぜ看護師になったか、なんのために看護しているのか、看護・医療に対する価値観、倫理感、看護観を意識的に自分の中に育んでいってほしい。いざという時に迷ったり後悔したりしないように。最後は自分で判断できるように。震災前は地域との連携が弱かった。困ったときはどう助け合うのか、地域を回つて、お互いの状況を話し合い、確認し合つた。顔が見える、困ったときに困つたと言え、関係の構築が必要。お互い様で、有事に備えよう。自分の施設の備えの総点検をしてほしい」

「備え」というのは、ただ単にそれまでないものをつくれればいいというものではない。いざという時に機能するものをつくつて、初めて「備え」と言えるのである。東日本大震災の発災から八年が経過して、その体験の風化が指摘される。一方で、東南海トラフ地震を始めとして、近い将来に予測されている地震災害も複数あり、その備えのために、やはり東日本大震災における経験知は有用である。これからの、機会ある毎に、そうした震災体験による経験知を他の地域の人、この地域の人からの人に向けて、積極的に発信していきたいと考えている。

「備え」をもう一度見直して

これら看護管理者の方々の言葉は、自ら体験したことに基づいたものであるだけに、説得力がある。どこにいても、災害の発生を免れることは困難である以上、

## 執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)  
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。  
「東北ブログ」  
http://blog.livedoor.jp/anagnas1/



Facebook  
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

# 『東北人が奮い立つ?』『理想の国』というワードの事』

一般的に東北、特に筆者の郷土・山形県といえ、朴訥だとか保守的だとか、穏やかな県民性で治安も頗る良い、東北らしさの代表のように思われているフシがあるけれども、実は近代の戦時中は割りととんでもない人物がここの山形県に輩出されたりして、それでもあまり県民は誇らしく思っていないのか、知っていないがあまり口にはしない現状があるように思う。

第二次世界大戦前後でも言える不穏な時代、世間を騒然とさせる怪事件の主犯だったり、事もあるように外国の土地を切り取って「理想の国」を作ろうと動いた首謀者だったり、彼らは実



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始める東北好きである。

際現在に至るまで「謎めいた」「不気味な」存在として地元でもしばしば黒歴史的に扱われる、東北の闇の側面なのである。

実は、これから紹介する東北人たちはいずれも件の「理想の国」に各々深く関わった。その国の名を『満州国』という。本稿では、前回に引き続き近代の東北人の姿を追いつつ、全くと違うテーマ「蝦夷の時代より東北人の心に宿り、しばしば時代をも動かしてきた『理想の国』なる概念とは一体何なのか、想いを巡らせてみたい。

『満州国』とは、日本海を挟んだ対岸、即ち大陸の地域に十年余りしか存在しなかった「幻の国家」である。幻とはいえ、著名人だけでも池田満寿夫や小澤征爾、浅丘ルリ子、別役実梅宮辰夫、それに赤塚不二雄など多彩な人物の出身地となった、現実の歴史的国家に間違いはなかった。

満州とは、いかなる地か。現在は中華人民共和国・最東部の領内である、日本の実に三倍の広さを持つ地域で、古来より肅慎や靺鞨、女真など古代日本とも関わった多くの民族が勃興・衰退を繰り返してきた複雑なエリアである。日露戦争を前後してロシ

アと日本が様々な条約下で租借地とし、半植民地化していたが大正に入り馬賊出身の張作霖が実効支配するようになる。・・・という、とにかく国家間・民族間の軋轢の火種には事欠かない、一言でいえばユニークなフールドなのである。

この異郷に降り立った一人の日本人・甘粕正彦は仙台出身だが、越後時代より上杉氏に仕えてきた米沢藩士の子であった。彼は東京での憲兵時代における「甘粕事件」で悪名高い、退役軍人だった。

関東大震災後の混乱中、アナキスト大杉栄と妻、そして幼い甥を拉致、拷問の末に殺害、遺体を遺棄したという凄惨な事件。

彼は、大東亜戦争の引き金ともなった「満州事変」で爆弾テロ、後の満州皇帝・溥儀の説得や拉致など様々な重要な謀略に暗躍する。さて、この「満州事変」という日中間武力紛争、真の立役者はこれまた何と、山形県人である。その男・石原莞爾は鶴岡出身の陸軍参謀で、上官にも桶突き敵を多く作る異端児として知られていたが、強烈な思想と閃きを持つ天才的戦略家でもあった。甘粕は同郷に近く旧知であった石原に会い、張作霖とその息子・張

アと日本が様々な条約下で租借地とし、半植民地化していたが大正に入り馬賊出身の張作霖が実効支配するようになる。・・・という、とにかく国家間・民族間の軋轢の火種には事欠かない、一言でいえばユニークなフールドなのである。

この異郷に降り立った一人の日本人・甘粕正彦は仙台出身だが、越後時代より上杉氏に仕えてきた米沢藩士の子であった。彼は東京での憲兵時代における「甘粕事件」で悪名高い、退役軍人だった。

関東大震災後の混乱中、アナキスト大杉栄と妻、そして幼い甥を拉致、拷問の末に殺害、遺体を遺棄したという凄惨な事件。

彼は、大東亜戦争の引き金ともなった「満州事変」で爆弾テロ、後の満州皇帝・溥儀の説得や拉致など様々な重要な謀略に暗躍する。さて、この「満州事変」という日中間武力紛争、真の立役者はこれまた何と、山形県人である。その男・石原莞爾は鶴岡出身の陸軍参謀で、上官にも桶突き敵を多く作る異端児として知られていたが、強烈な思想と閃きを持つ天才的戦略家でもあった。甘粕は同郷に近く旧知であった石原に会い、張作霖とその息子・張

フルも劣悪なままの非近代的状态にある、と語る。日本の持つ技術と、帝国軍の威力があればこの地の眠ったままの資源も有効に(つまり、思い通りに)使え、日本も満州も相互に発展していけるのではないかと、二人は異郷にて議論を重ねた。・・・と語られている。

石原莞爾は「日蓮宗」の熱心な信者としても有名である。日蓮宗と他宗との違いは、仏教の力で国家をも動かそうとする思想だった。当時、日蓮宗諸団体の統合からなる「国柱会」にて造語されたスローガン「八紘一宇」は「道義的な世界統一」即ち全国家民族の平等と相互理解の上での一体化を意味するものだったが、石原莞爾にとつてその思想の実現には軍人なりの布石が必要であった。

それは『最終戦争論』という壮大な未来視的イメージである。戦争は人類滅亡寸前段階まで「進化」を遂げ、それを乗り越えた先に絶対的平和が訪れる。・・・という内容である。その最終的戦争は、西洋の代表的国家であるアメリカと、東洋の代表的国家である日本との間で進行される、というのだ。となれば、石原が目指すべきところは一つ。「アジアを日本の力を以つて一つにする」他になかったのである。

謂わば石原莞爾にとって、

満州国とは「八紘一宇」の箱庭的具現化に他ならなかった。彼の見事な策略と、甘粕の暗躍による満州占領後、滅亡した清朝(十七世紀の満州から中国・蒙古を広く支配した一大王朝)の遺児・溥儀を皇帝に据え、「王道楽土」「五族協和」を掲げて『満州国』を打ち立てる。それは日本の占有や植民地ではなく、日本の指導の下、満州・中国・朝鮮・蒙古など各民族が平等に支えあい、発展する世界。最終的には、日本人も日本国籍を捨て、満州人となる。・・・まさに石原莞爾は、新世界を創造せんとする、途方もない人物だったのである。

そして、ここにもう一人その鋭利な頭脳と思想によつて帝国軍を動かす男が「満州国」建国に賛同し、その国家創設の正当性を世に広める役割を果たす。その名を大川周明、これまた何という事か、酒田出身・石原同様、庄内人なのである。

もともとがインドの独立運動に参加し、イスラム教にも終生傾倒する事になる強烈な「亜細亜主義者」。欧米からの東洋解放と合わせて「日本改造」を唱え、その著書は大きな波紋を呼ぶ。その思想は実践に発展「昭和維新」と称する一連のテロ行為や五・一五事件に関与し、石原莞爾からも激しい批判を受けた。とは

言え、最終的に「東洋の平和」を目標としながら、武力と策謀に明け暮れる二人は似た者同士だったかも知れない。大川・石原両者それぞれの構想はしかし、その後の東條英機との確執などによって阻まれ、日本は彼らの望む方向とは違つ、悲劇への道を辿る事となる。

彼らの「理想の国」満州国は、その後どうなったのか。ドイツ、イタリア、フランスやタイなどに独立を承認されたとはいえ、それらは国際連盟を脱退していたり、ドイツの占領下にあつたりという背景があり、国際連盟からは日本の傀儡国家と断定され、その存在を認められなかった。東條政権の下、泥沼の戦争に嵌まり込んだ日本が敗れると、ソ連が日本との中立条約を破棄して侵攻し、満州は大混乱となる。多くの日本人が殺され掠奪され、敗残兵はシベリアへ送られ、皇帝は逃亡して満州国はわずか十三年余りで消滅する事になるのである。

石原莞爾と大川周明ともにA級戦犯として東京裁判の法廷に立たされる。石原は東條英機との反目を根拠として、そして大川は法廷での奇行から精神異常と断定され無罪となる。特に大川の奇行は演技だったのではとの疑惑もあり、二人の放免は彼らにとって不合理な裁判にてアメリカから勝利する為の、最後の戦い

だったのかも知れない。さて、もう一人の東北人・甘粕正彦はどうしたか。始めのうち、石原と互いの能力を認め合っていた甘粕であったが、古くからの東條英機との師弟関係もあり、石原と東條が対立するに伴い二人の間にも微妙な齟齬が生じ始めた。彼らは互いの欠点も正確に把握し、石原が「理想のない実務家」と甘粕を批判すれば、甘粕は石原を「明後日の計画は優れているが、明日が抜けている」と断じた。

石原が満州を去った後もこの地に留まった甘粕は、満州映画協会(満映)の理事長に就任するが、そこで甘粕に対する関係者の評価は意外なものであった。満映で活躍した若き日の森繁久彌は言う。「満州という新しい国を立派に育てようと、若い者と一緒に夢を見てくれた」中国と日本の間で苦しんだ女優・李香蘭が「満映を辞めたい」と申し出ると、「気持ちよくなる。貴女の立場の不自然さはずっと感じていた。今まで本当にお疲れ様でした。」と云つてその場で契約書を破つたという。上層部の者が「女優を抱かせる」と云うと「女優は酌婦ではない！」と毅然と拒絶し、また日本人も他民族も全てのスタッフの待遇・給与を差別なく一律にした。これはかつての盟友・石原莞爾の理想とした「全ての東洋人が平等に発

展する世界」のささやかな彼なりの実践ではなかったのだろうか。ソ連の侵攻後、彼は満映の社員を集めて感謝の言葉を述べ、会社の預金全額を退職金として分け与え、と、独り服毒し果てた。葬儀には彼を慕う三千人もの人々

が一口もの葬列を作ったと伝わっている。どうも「甘粕事件」の残酷な首謀者のイメージと矛盾する実像である。そもそもかの事件において「子供好きの息子にできるはずはない」という母親の証言や命令系統上の疑問点などもあり、甘粕が上層部や部下を庇い、責任を独り負ったのではないか、という説が有力視されている。とすれば、彼が夢を見た満州とは、今さら拭えぬ無実の汚名が残る日本を捨てた果ての新天地、あるいは「死に場所」だったのかも知れない。

変革の思想家という、幕末の吉田松陰が思い浮かぶ。江戸期に抑圧され続けた長州ら西日本が松陰や坂本龍馬を生んだように、明治期より賊軍として貶められた東北だからこそ、石原



満州国地図

や大川の出現を許したのだろうか。しかし彼らの「理想世界」その途方もないイメージとその実現に向かう行動力は遙か昔の平泉藤原氏を思わせる。東北人による、東北人のための、東北の内側で永続できる国家。しかし時代は、日本国内の不況と困窮、欧米の侵略に対する不安と憎悪に満ちて、石原ら東北人本来の発想力と行動力を歪ませ、間違つた理想国家への道を歩ませたという事だったのか。ならば新たな石原莞爾・大川周明の出現する未来、東北は彼らにどんな理想世界を想起させる事ができるか。・・・現代の東北人一人一人に問われているのではないだろうか。その時代の甘粕正彦が降り立つ新天地は、きつと驚くほど近くに、そして死に場所ではなく、生きていく大地として、そこにあるはずだ。



アケビコノハ



ヒカリゴケ

シリーズ 遠野の自然  
「遠野の立秋」  
遠野 1000 景より



高原の馬たち



木漏れ日

先日、三十数年前のアメリカ映画「コクーン1・2」を見た。異星人と老人ホームの老人たちの交流が主題。異星人の住む星は病気もなく不死で永遠に生きられる。異星人が星に帰る時に誘われ大勢でその星に行く。

みな老化に嫌気がさし、不治の病も抱えている。心残りには家族と別れることだけ。後に短期間の「里帰り」となるが、結局は地球に残る決断をする。そして病気の老化、死と家族をすべて受容するという思わぬ展開。

日本の四季は死と再生の循環である。生命も死があるからいとおしい。そうした揺るがぬ循環に、季節や動物の写真を見てあらためて気づくこの頃だ。



ヒマワリ畑と SL 銀河



ゴンゲン舞



木の根



フサスグリ

# 【古代の鉄を探索する旅】②

## 出雲と奥出雲の古代の鉄を求めて

### 古代出雲歴史博物館 セミナー参加

いつか必ず出雲に行こう  
と思っていたが、ひょんな  
ところから一泊二日の出雲  
への強行軍を決定すること  
になった。

最近、日本の古代の鉄の  
歴史に惹かれて、いろいろ  
調べ物をしてきたが、一度  
系統立った学習をしなければ  
と感じていたが、そんな  
ところにおあつらえ向きの

チャンスが舞い込んできた。  
古代出雲歴史博物館で開  
催される「日本列島におけ  
る鉄づくりの歴史的展開」  
というセミナーである。こ  
れで日本列島の歴史が概観  
できると早速申し込んだ。

生来の貧乏性からか、わ  
ずか二日の隙間にスケジュ  
ールを一杯詰め込んだ。  
そのためには、レンタカ  
ーを駆使して、公共交通の  
時間に縛られずに自由に行  
動するに限る。

初日は、出雲空港からレ  
ンタカー屋に行き奥出雲へ  
最初「奥出雲たたらと  
刀剣館」と「菅谷たたら山  
内」。そして出雲に取つて  
返して「古代出雲歴史博物  
館」。

翌日は、早朝から、稲佐  
の浜行き。「弁天島」、国譲  
りの岩とも言われる「屏風  
岩」、探すのに一苦労した  
「因佐神社」訪問。  
次いで、前々から行きた  
かった「須佐神社」。その

近くにはありながらもなか  
か見つからなかった「スサ  
ノオ館」、稲田姫命社跡地。  
出雲に戻り、「西谷墳墓  
群史跡公園」、「出雲弥生の  
森博物館」。途中で橋上か  
らの「斐伊川」撮影。さら  
に「荒神谷遺跡」、「加茂岩  
倉遺跡」、最後もなかなか  
見つからなかった「神原神  
社遺跡」。

ざっとこんな行程だった。  
第一は、日本の考古学者  
は発掘物に異常に執着して  
発掘物がなければ「存在」  
を否定するのだということ

出雲のたたら製鉄の歴史  
はそんなに古くない。飛鳥  
時代あたりからという。  
四つめは、鉄穴(かんな)  
流しという、山を切り崩し  
て砂鉄を採取する手法は中  
世以降であること。



屏風岩(国譲り岩)



因佐神社(建御雷神)



出雲大社



高さ48mの出雲大社本殿想像模型



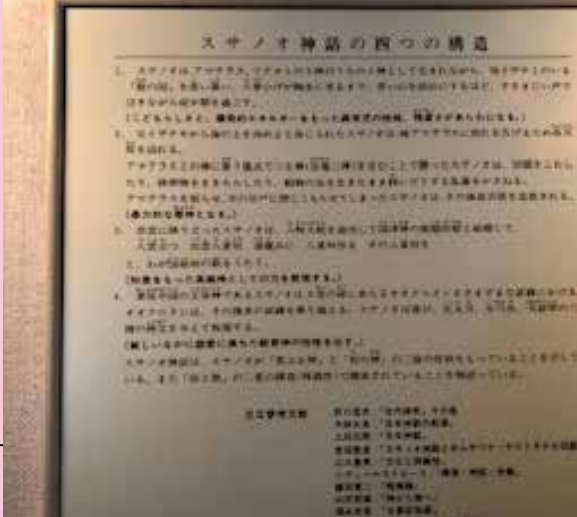
出雲大社巨大本殿の柱



古代出雲歴史博セミナー【日本列島における鉄づくりの歴史的展開】



最も行きたかった須佐神社



スサノオ神話の四つの構造



西谷墳墓 2号墓



斐伊川-ヤマタノオロチに見える

